

●葛西佐太郎氏(積丹郡 入舸村)

葛西家は積丹入舸村の舊家にして俗に所謂草分けなるもの本籍は陸奥國北津輕郡協元村にして年々の漁季郷國より入舸村字出岬の漁場に出張し漁撈を營み漁期終れば飯郷し一見入舸人士たらざるの觀あるも佐太郎の力を入舸の村治に盡し公共事業に漲く篤きを以て一町村の名聲を知らざるなし是を聞く葛西家の先代夙に志を本道漁業に抱き徳川幕府時代已に積丹に航し出岬の地の漁利に豊富なるを看破し激浪と闘ひ暗礁を排し苦心漁場を創設す寫眞版示す處の卒漁場乃ち是れなり自來年々漁季に入稼して之が經營に懈らず次第に其の歩武を進め佐太郎氏の家を承き之を宰するに及んで建網二統を経するの現在を來せり氏明治六年を以て生れ幼より漁撈を研鑽し漁業の事一として精通せざるなく加ふるに經綸の才に富み施設一も過たず年々八九百石の漁を逸したるなく同業多くは氏經綸の才に服す更に聞く氏任俠一諾を重んじ未知の人來り急を訴ふ氏救援を諾せざるなし況んや知己朋友に於いて氏全諾の慶に得らざるもの少なしと爲さずと以て氏の人格を想見すべきなり氏水産物の製作漁撈の改良に銳意し漁業界の發達に貢献せんを期し日夕之が研究に怠らず氏の如き春秋に富み有爲の士を漁業界に見る意を強ふすべき也。



榎引たけ子

榎引金藏君

●大川たけ子

(積丹郡 入舸村)

大川たけ子は山夕旅館の經營者なり入舸の地固より僻積丹半島の一隅に過ぎず従つて家屋の建築宏壯敢へて人目を驚かさなく設備又敢へて文明的ならずと雖も山夕旅館の入舸村唯一の獨占旅舎として名聲を知らるゝもの主として女將たけ子の懇切を主として食膳の注意衛生を專一とし其の對等的均一主義と待遇の親切とは行旅の客をして我が家と同一の感を抱かしむるに依る蓋し旅舎にして旅客に對し自己の家と同一の感を抱かしむるは旅舎の成効したるものたけ子一巾幗の身を以てして經營を誤らず頌すべきかな。



●葛西喜一氏(積丹郡入舸村)

歴代漁業を經し漸を以て進み次第に家礎を堅ふし遂に嚴たる一家を爲す由來漁業の一事や浮沈極りなく大家大家ならず小家小家ならず一朝にして産を興すもの一朝にして産を破るもの漁業經營や眞に至難なりと云ふべし此の至難の漁業を經し葛西氏の漸を以て進み能く父祖の威名を發揚して今日あるもの知るべし葛西氏經營の才の尋常ならざるを氏明治三年二月を以て陸奥國北津輕郡協元村に生る家代々漁業を經すの氏祖父龜三郎氏勇邁夙に北海の怒濤を蹶破し今より六十年前積丹入舸の地に航して漁業を營みてより年々の經營次第に歩を進め刺網より建網に及び氏の代に至りて更に發展し建網二統半を建つるの現在を來せり近年打續きたる不漁の結果聊か失意の觀あるも氏更に屈せず昨年より樺太漁業に従事し一大發展を畫しつゝあり氏更に力を入舸の村治に盡し村總代として盡瘁多年消防組の設立に大谷派説教所の設置に巡查駐在所の設立に氏一として其の衝に當らざるなく村民擧げて其の功に服す氏今や聊か失意の境にありと雖も其の經營の才堅忍の意氣捲土重來期して待つべく氏一人の活躍を欲せざるなし吾人は我が漁業界に氏の如き堅忍自重の士あるを慶するものなり獨り漁業界の慶事のみ非ざれば也。

●若林晴治氏(積丹郡入舸村)

渺たる一島地佐渡而して本道の地佐渡人の成効したる多し赤裸々の境遇より挺身克く成効を贏ち得る佐渡人思ふに堅忍力行の意氣不屈の精神他國人に超越するが爲めたるなからんや然り佐渡人の成効は堅忍力行の意氣に倚る若林氏は佐渡人なり其の克く積丹入舸の地に成効したるもの又佐渡人の面目を辱めざるものと云つべきなり氏今や産を爲す數十萬圓身は入舸村郵便電信局長に任せられて令名高く商を經し漁業を營み綽々として餘裕を示す精力主義の人たる思ふべく又以て氏成効の偶然たらざるを知るべき也。





忍  
路  
郡

## 忍路郡

忍路郡は、東高島郡に接し、西は余市郡に境し、南小樽に跨り、北一帯忍路灣を抱く面積三方里餘、沿岸線四里二十六丁、此の間所謂忍路灣なるものにして、其の風光の明媚なる、鐵道通過の旅客尤も眼を喜ばし、相呼んで快哉を叫ぶ、其の風光を稱せざるなし、唯だ見る滿々たる海波青空に連り、波乎、雲乎、別つべくも非ず、此の間白帆風を孕んで、行くは何處ぞ海岸は峭崖削立數十丈、巨巖點羅小巖羅布、之に激するの怒濤、是を打つの狂瀾、忽ちにして雪山崩れ倏にして珠玉舞ふ若し夫れ甲崎龍の岬の間、一帯白沙の沿岸に到らんか、汀渚清ふして細沙玉の如く、眞に人をして恍惚たらしむ蓋し忍路の地一郡漁業を専業とし、地味又農業に適せず、僅に蘭島の地に農民を見るのみ。

忍路はアイヌ語ウシヨロの轉訛したるものにして灣の意義なり、昔時モイレ領と稱せしも、後ち忍路領又は忍路場所と稱せり、松前藩臣古田宇市の領地にして場所受負人は高島郡と等しく西川傳右衛門之を受負ひ、連續明治二年に及びり郡内、忍路鹽谷、蘭島、桃内の四ヶ村より成り、全郡盡く漁業家にして、一ヶ年一萬石以上の鯨を漁獲す、従つて農産物としては、僅に麥類及び萃菓の幾分を産するのみ。

郡内忍路、鹽谷の二停車場を有す、忍路停車場は蘭島村の中央交通至便の地にあり。



り、後に山を負ひ、前に弦月狀の忍路灣を控利し、風光明媚を以て知らる、鹽谷停車場は鹽谷村を去る約十四町鹽谷灣の背後にあり、全村漁業を業とするも近時農業に従事するもの漸やく多きを來し字伍助澤に殖民地ありて有名なる櫻井農場茲にあり。

忍路の地たる、彼の追分節に依りて知名の地となれるも、漁業地として、將た沿岸風光の明媚を湛ゆる以外、別に特記するの事なし。



● 志和貞藏氏 (忍路村)

志和氏は佐渡眞野村の人明治九年志を本道商業に抱き渡道してより小樽に岩内地



志和貞三君

方に種々なる行商を試みて備に辛酸を嘗む明治十三年居を忍路村にトしてより雜貨荒物吳服太物業を營む氏の堅忍にして精勵屈せざるの意氣は忽にして居村民の信用となり信用は業務の隆盛と成り年々其の基礎を堅ふして遂に今日を來せり氏資性忠直熱誠戊申詔書を拜讀するや御主旨を奉戴し忍路村規約貯金組合なる物を組織し熱心衆庶を勸誘し村民舉て組合員たるの隆を來せしもの一に氏勸誘の力なりと云ふ氏眞に傳ふべきなり。



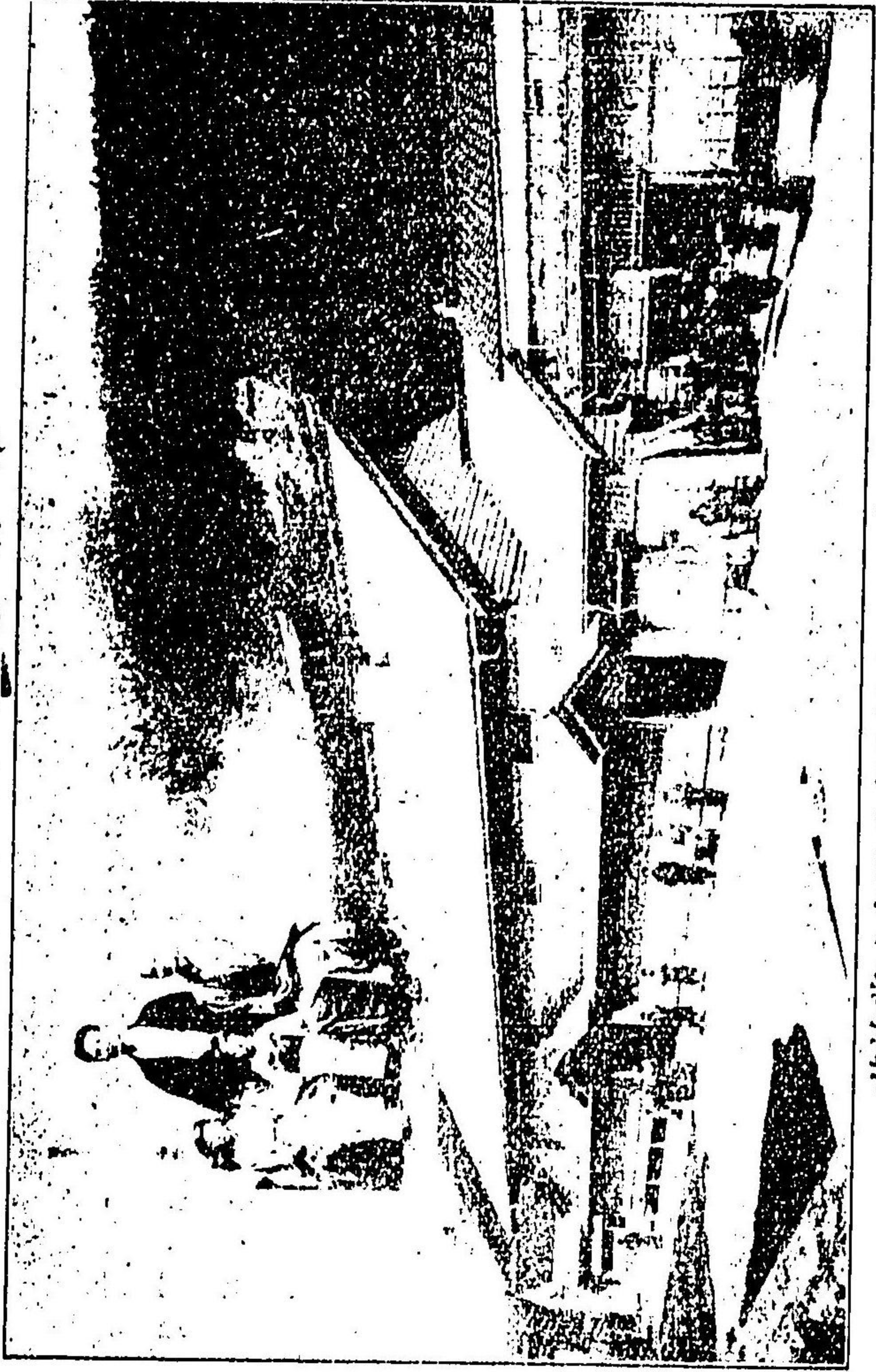


渡邊石藏君

● 渡邊石藏氏 (忍路村)

渡邊石藏氏を傳するに先ち吾人は先づ石藏氏の先考常吉氏を傳せざるを得ず常吉氏松前郡江良町の出五十六歳を以て忍路村に沒せらる資性明敏勇邁にして先見の明に富み身は漁業家として起ちながら毫も鯨漁業を樂觀せず早晚鯨漁業の悲運に見舞るべきを透見し漁業家の副業を見出さるべからざるを唱導し耕地に水田發開に果樹園の創設に養鯉事業に一として企てざるなく以て子孫悠久の基を畫す何等の先見何等の達識常吉氏は是れ漁業家の英傑なり見よ漁業界近年の状況を常吉氏先見の明の如く年々の薄漁歳毎の悲運漁業界の不振より荒廢せんとする漁村漁業家を救濟せんが爲めに如何に漁業家副業の奨励され絶叫されつゝあるかを常吉氏は夙に之を遠見し十有餘年の過去已に之か施設を爲して冥目せり天若し年を籍さば如何に氏偉業の見るべかりしならんに惜むべき哉然れども嗣子石藏氏の遺志を守て屈せざるあり耕地果樹園九町歩餘水田五町歩餘の嚴として家産を爲し尙ほ水田一町五反歩の開發されんとしつゝあるもの常吉氏先見の賜物たらざるはなし渡邊家今を去る四十八年前忍路に居住し微々たる刺網業者より現在建網二統を経する現時を來したるもの父子偉ならずんば豈に今日の成効あらんや。





右治善は右回若吉常村木は面正列后てつ向  
子  
は中央回君三常は左回

木村常吉氏邸宅

●木村常吉氏(忍路郡桃内村)

忍路郡桃内に於ける屈指の漁業家を問はば何人も指を木村家に屈せざるなし然り木村家は同村に於ける有数なる漁業家なり其の資産に於て其の名聲に於て居村重鎮の實を失はず當主常吉氏は越後の産年齒不惑を越ゆる七新瀉縣荻羽郡宮川町に生る家代々網糸問屋たり氏の先考善治氏安政年間より本道江差に網行商を爲し氏又明治四年同業を以て江差に居住す斯くして十年經營備に辛酸を嘗む十四年小樽に出で板谷宮吉氏商店に入り鋭海陸物産に對する商機に參し商略を習ふ忠勤十ヶ年一人氏の至誠忠實に服せざるなし忍路郡桃内の漁業家木村氏深く氏の人となりて服し強いて氏を憇して養嗣子たらしむ爾來常吉氏木村家萬事の衝に當り漁業を経す幸にして二十六年より三十年に到るまで年々大漁を博し家礎益々堅し茲に於いてか漁業を擴張し居村に二統を経する以外北見紋別郡幌内に二統猿間に一統を経し年々出張以て漁業に従事し年々の收利少なからず氏又力を居村自治の發達に盡し併せて公共事業に貢献し身は村會議員農會副會長學務委員に推され名聲籍甚たり氏の住家は桃内の一美觀にして建坪百二十坪建築宏壯壯廉を極む吾人は氏の如き堅忍にして新智識ある漁業家の桃内に去嘯しつゝあるを喜ぶものなり。







## 高島郡

高島郡は小樽支應管内の最小郡にして高島祝津二村を有し面積僅に一方里餘に過ぎず東北海に面し、南小樽區に境し、西忍路郡に接す、地形山に跨り海に面し其の海岸線は三里廿七丁を算す、往古より鯨の豊漁地として知られ、始めシクドツ領と稱せしも、後ち高島領又は高島場所と通稱し以て今日の名稱となれり、蓋し高島の地形たる山趾直に海に没して斷崖を爲し、沿岸巨巖の屹立せるもの多きを以て邦人之を名けて高島の地と稱せしならんか、松前藩政時代、蠣崎嘉藏の領地たり、場所受負人は西暦一千六百六十七年(寛文七年)松前藩士下國安藝の幹旋を以て江州の商人西川貞右衛門之を受負ひ忍路高島二郡の受負人として、明治二年請負人廢止まで連續繼續せり、當時寛文年間創開せし漁場は高島村二ヶ所、祝津村二ヶ所、手宮村一ヶ所、通計五ヶ所に過ぎざりしと云ふ。

同郡は地形形勝小樽の灣を抱くを以て幕政時代對魯問題の急なるに及び、兵備并に防禦を主としたる視察者に依りて其の價値を認められ、近藤重藏氏先づ高島の地の形勝を説いて、幕府に建議し、堀織部正又幕府に説く處ありしを以て早くより幕士の注屯を見、又道路の開鑿をも見き、其の郡内の一部に夙に厩の地名の存するに徴しても、馬ありしを知るに足るべし、然れども地は是れ漁業地、土人と出稼漁夫と



相ひ半ばして雑居せしに過ぎず、明治の初年兵部省の直轄に屬し、明治三年開拓使に歸し、高島、手宮、色内、祝津の四ヶ村を設く、同年小樽假役所の管轄となり、手長役場を設けらる、自來小樽郡役所の設けられてより幾星霜間、小樽支廳に改めらる、また其の管轄に異なるなし、明治卅三年七月自治制の施行せらる、や、既手宮色内は小樽區に編入され、高島郡は高島祝津二村戸長役場開所され、小淺正男氏戸長として來任執務せり、卅五年三月二級町村制施行され小淺氏依然村長たり、同年六月小淺氏の朝里村長に轉するや森谷秀一郎氏其の後任となり在職四十一年八月に及ぶ、同月森谷氏の退職と共に山村直松氏村長に任せられ現に其の職に在り。

村役場は村長山村直松氏、収入役竹島武治郎氏、書記吉澤福彌氏、同、若狭友太郎氏、同、石川貞太郎氏、同、根田倉之助氏以下六名を以て執務し、二ヶ村の戸數一千十餘戸、人口五千七百十餘人其一ヶ年の町村費豫算額は一萬四千圓前後にして、自治の成績極めて良好なるは喜ぶべきなり。

高島小學校は、明治十七年十一月の創立に成り、創立當時は祝津小學校高島分校と稱せしも、廿二年二月獨立し、公立高島小學校と稱し、廿八年三月高島尋常小學校と改稱し、卅一年建築費一千四百圓を投して校舎を新築し、卅二年六月終業年限を四ヶ年と爲し、以て今日に到れり、校長は乙村平三郎氏以下木村三郎氏市川元氏、金須道四郎氏、三原フサ子、高橋徳助氏、齊藤ハルヨ子の諸氏熱心教鞭を執り、生

徒總數男百九十七人、女百十一人たり。

祝津尋常高等小學校は、明治九年十一月の創立になり、創設最も古し、當時祝津教育所と稱せしも、明治十年九月、量徳小學校祝津分校と稱し、明治十四年獨立して祝津小學校と改稱せり、二十年五月簡易科祝津小學校と稱し、廿八年四月祝津尋常小學校と改稱、卅四年四月高等科を併置して祝津尋常高等小學校と稱し、同村に建築費四千圓を以て校舎を新築し以て今日に及べり、生徒總數男百七十六人女百六人、校長は高橋定行氏、以下渡邊哲藏氏、赤池孝彦氏、三浦芳藏氏、木下福藏氏、松田スキ子、中野リヨ子の諸氏何れも令聞高し。

本郡は漁場にして又雜漁地なり、小樽十萬の人口に對する生魚の供給、四時本郡よりせざるなし、今最近三ヶ年に於ける水産物統計を見るに左の如し。

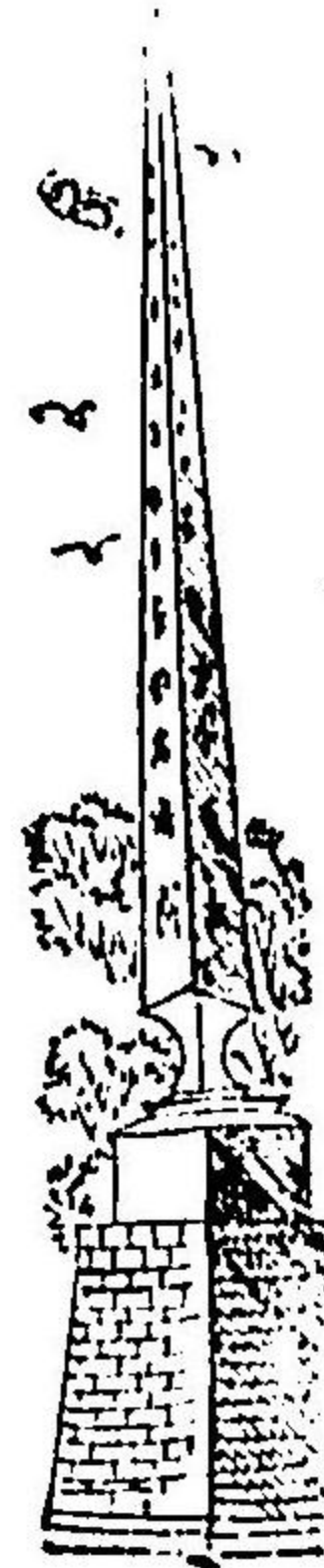
品名	三十九年		四十年		四十一年	
	數量	時侯	數量	時侯	數量	時侯
身欠鰈	八〇六	二四、一八〇	八二〇	一四、四一八	三四五	六、九〇〇
鰈	一八〇	三、六五〇	一八二	四、八五九	一一一	二、五五二
鰈	八、三五八	二、四二九六	三、三七七	五、七四〇九	一、四六六	二、〇〇九八
鰈	一、〇二九	一、二四七七	一、六六六	二、二六五六	八三九	八、三九〇
鰈	一、二七	一、九六七	一、三八	二、三六六	八二	一、〇六六





寺田磯吉君

近時高島の地に漁港を築設し、大に其の發展を畫せんとするの計畫あり、事實と爲つて顯はれんか、高島の般賑、高島の發達、誰れか識者を俟んや、高島附近海上、春期稀れに辰氣樓の出つるあり方言之を高島ヲバケと稱する由松浦武四郎氏日誌に記され居るも吾人未だ之を知らずと雖も、同日誌に依れば武四郎氏は明に之を忍路郡シユブンモイより望見せしと云ふ。



雜魚	生魚	生魚	生魚	生魚	鯨魚	乾魚	棒魚	鯨魚
七四六、六三三	四〇	五〇	一八五	三六〇	四六九八	六	三二四	二四三五
九〇、〇六二	一、一〇〇	六五〇	二、九四七	二、七五七	一三、五四四	九〇	二四三五	二四三五
一五、六四〇	四二	一三	一六〇	三三三	一〇、〇五五	五二	三二五	三二五
四、一五三	一、四四九	五二〇	二、二七九	二、八八六	五、五三〇	九七四	三六三三	三六三三
三三〇	二四	一、二二三	六二〇	九四	五、四三二	四二〇	二二〇	二二〇
二、六四〇	九六〇	七、三九八	九、三〇〇	七九九	一、四三三	六、七三〇	一、八九〇	一、八九〇

小樽區外七郡案内



◎寺田大吉氏(高島郡祝津村)

本道水産界の急務何物か又魚具製造に若くものあらんや寔に魚具の製作は其の價格を高ふし水産界に資するのみならず漁業家を利する莫大なるもの有りて存ず比年本道漁業界不漁に見舞れ漁業家の困憊疲弊漸やく其極に達せんとす若し夫れ漁業家の多くの舊套より脱して奮然漁具製作に従事せんか優に不漁より免れて利を見んや必ぜり而かも多くの漁業家依然として舊套に眠り鯨の己にべ粕時代を去りたるを知らずして製作事業を顧みざるは嘆すべきの最たり本道漁業界此の如き状況の間吾人は寺田太吉氏の高島郡祝津の地に去嘯し夙に魚具製作の必要を唱導し身親しく具柱製造に従事しつゝあるの偉なるに服さずんば非ず寺田氏は本道江差の人先代磯吉氏雄志あり夙に本道西海岸漁業の有利なるを看破し地を高島郡祝津に相して永住の地と爲し明治の初年當時僅に十餘歳の太吉氏を拉して祝津に移住し以て今日に及び嚴たる寺田氏の基礎を爲し九十歳の高齡に達して白玉樓中の人と成れり太吉氏克く先考の志を守り諸般漁業を經し貝柱製造の有利なるを悟り製造工場を興す五ヶ所自ら四ヶ所を經營す其製作に熱心なる幾多共進會博覽會に笹口身欠胸鯨を出品して賞牌褒狀を受る夥し眞に偉なりと云ふべき也。



君郎八與木茨



●茨木與八郎君(麻島郡祝津村)

茨木氏は本道漁業家中の雄なるもの水産界の宿將として一人其威を仰かざるなし大資産家として名聲家として氏今日を來せる因の僅に二百圓の資金なるに於いて茨木氏の主志成効真に驚嘆すべく真に傳ふべき也氏山形の人赤貧なる漁業家に生れ幼より辛酸を嘗む萬延元年十九歳慨然本道に航し爲すあらんを期し郷國を辭す渡道後高島郡祝津鰯釣漁夫として雇はれ秋期は石狩に赴きて鮭網漁夫となり困苦力行十年一日の如く遂に二百圓を貯へ得たり氏乃ち漁船漁具を整へ始めて獨立鰯釣業に從ふ是れ氏が富巨萬を連ね名聲噴々たる今日を來せしの素因たり斯くして鰯釣を爲す多年明治十年の交得し處の資金全部を投じて鯨漁業に從事し更に大成す自來經營の巧と年々の大漁とは愈々氏の志を逞ふせしめ遂に經營漁網十數統一ヶ年の収獲四千石内外たる大漁業家たるの目的を達せり氏又夙に農業の漁業家に缺くべからざるの理を悟り巨費を投じて札幌郡豊平に水田を開發し其北城四十町歩餘に及び一ヶ年の収獲百餘俵に及ぶ別に手稻の地に耕地二十餘町歩を有するのみならず増毛に碓冬に幾多の海産干場を有し名聲當代に噴々たり吾人は氏の一貧家に生れ克已勤儉力行堅忍を以て成効を贏ち得たるの偉なるに服す。

●兵藤市之亟氏(高島郡高島村)

兵藤氏は本道福山の人嘉永元年十二月を以て馬形町に生る父祖歴代西川貞二郎氏



兵藤市之亟君

に仕へて四代に及ぶ氏明治二十年西川家を辭し地を高島郡高島村に相して居を下し漁業に從事す氏爛眼漁業家の鯨漁業にのみ從事するの非なるを悟り四季を通じて漁業に從事せんを企て其施設を完ふして奏効す自來家計豊に次第に名聲を知られ其教育の普及に力を盡し居村に小學校を設立せし氏の功は今も尙ほ村民の多とする處なりと云ふ氏今や郡中の富豪を以て知られ名聲籍甚たり氏成効の速かなる思ふに氏爛眼の然らしむる處又偉と可謂也。



●青山政吉氏(高島郡 祝津村)

高島郡祝津村は小樽支廳管内に於ける尤も古くより知られたるの地にして又漁利の豊富なるを以て名あり青山家は此の如く古くより開かれたる祝津に於いて又尤も古くより漁業に従事し實に安政年間よりの漁業家たり之を聞く青山家は山形縣飽海郡西遊佐村の出と政吉氏の先考留吉氏勇邁夙に本道漁業に志を寄せ一葉の小舟に北海の怒濤を踏破し五十一年前地を高島郡祝津に相して鯨漁業に従事し年々の漁期來り航して漁撈を營む明治維新となり移住土着の自由となるや氏を擧げて祝津に轉住し銳意漁業に従ふ時に明治六年なり當時の青山家たる渺たる一漁民に過ぎずして僅に刺網を経するのみ然れども留吉氏の勤儉力行と一家の協力一致とは年々其の利を収めて其利を苟くもせず次第に家運の隆盛を來し着々經營の歩を進め建網を建つるの隆を來すに及んで又年々の豊漁益々家運を盛ならしめ年々其の統數を増加し遂に高島郡内に十二ヶ所増毛郡に二ヶ所の漁場を有する大漁業家たるの今日を來せり政吉氏又克く父の意を體し經營一步を誤らず嚴たる大漁業家たるの門地を完ふし傍ら力を公共事業に盡し水難救濟の急務なるを説き身又大日本水難救濟會祝津支部長たり氏の如きは大漁業家たるの面目ある人と可謂也。

●南彌太郎氏(高島郡 高島村)

南彌太郎氏は高島郡の重鎮なり漁業家として有志家として將た代表的人士として事の苟くも高島郡に關するある他有志と共に氏を煩はさざるなし然り南氏は高島郡の有志家たると共に又熱心なる水産改良家なり吾人の特に氏を重として氏に服するは氏の有志家たるが爲めに非ずして水産改良家たるを以てなり有志家は之を何れの地にも求め得べし水産改良家に到つては寥々曉天の星と一なればなり明治卅六年第五回内國博覽會に鯨鰯粕を出品して褒狀を三十九年北海道物産共進會にノ粕を出し同しく褒狀を四十年東京勸業博覽會に數の子を出品して褒狀を四十一年八月北海道水産共進會にノ粕を出品して三等賞身欠鯨を出品して一等賞を得たるが如き如何に氏の水産物改良に熱心なるかを知るに足らん氏越前の人萬延元年を以て南條郡河野村に生る少壯より海運業に従事屢々北海に航し各地の狀勢に通ず明治廿七年仕を小樽港町田中武左衛門氏に求め同氏の漁業部を援け忠勤誠實の名を博す卅四年獨立高島村に漁業を経してより着々經營の功を収め全力を水産物の改良に濺ぎ以て今日に及べる物にして其の具柱製品の改良に資力を盡しつゝあるの一事確に感謝に價へすべく吾人は氏の健全を祈るものなり。



高等下宿

東京芝區三田四國町二番地壹號

# 有信館

電話芝(二二六五番)

館主 京極桂三郎

客室綺麗にして取扱親切、浴場の設備あり、電車は三田線、赤羽線附近にありて用達便利なり





明治四十二年九月二十日印刷  
明治四十二年九月二十日發行

定價壹冊金八拾錢

不許  
複製

著述者

小樽區花園町畑拾番地

山崎鑛藏

發行者

小樽區花園町畑拾番地

渡邊儀太郎

印刷者

東京市本所區番場町四番地

片岡武一

印刷所

東京市本所區番場町四番地

凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

北海道小樽區花園町畑拾番地

北世界支社內

賣捌

小樽入船町三十七番地

奧田商店

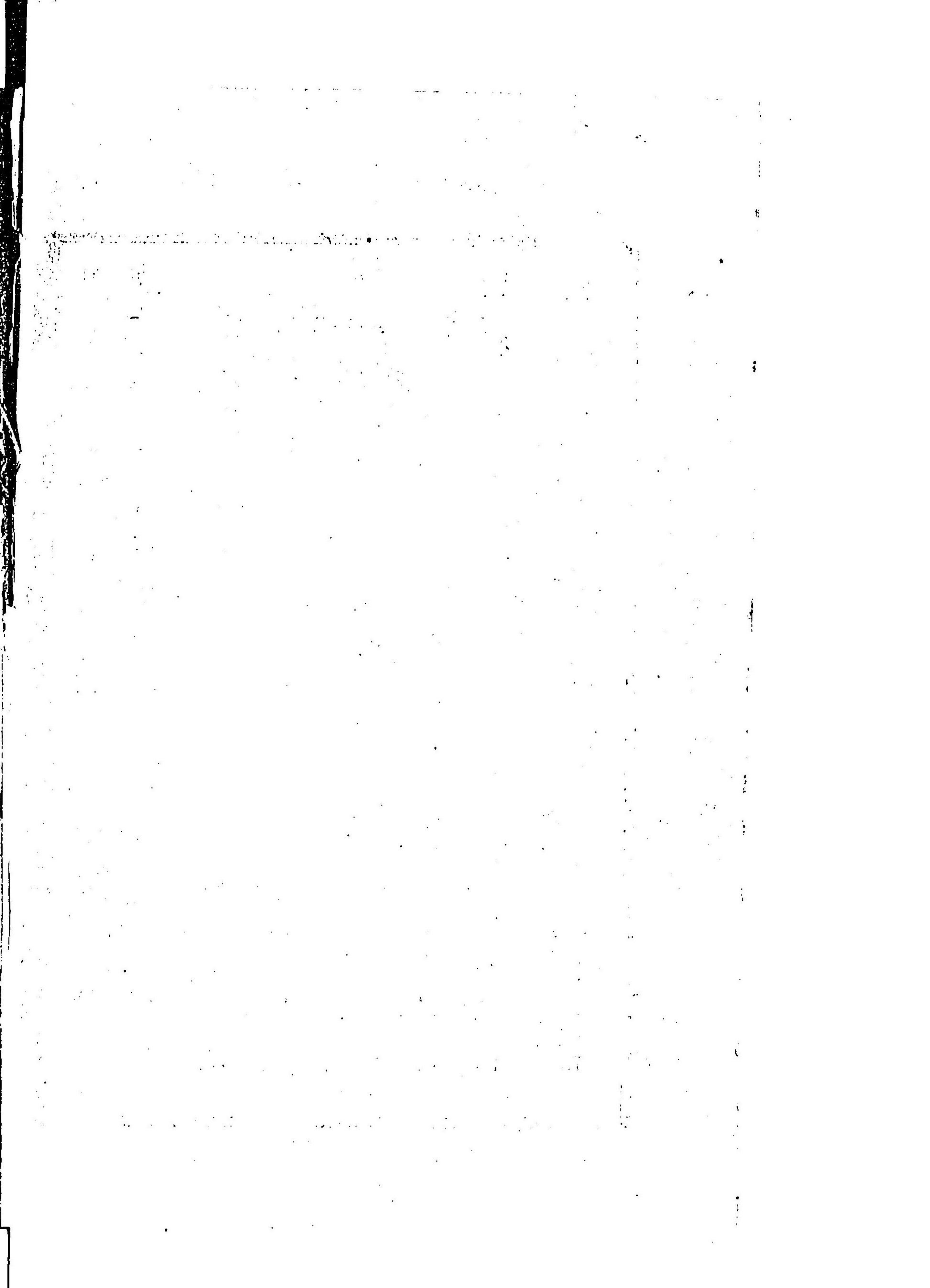
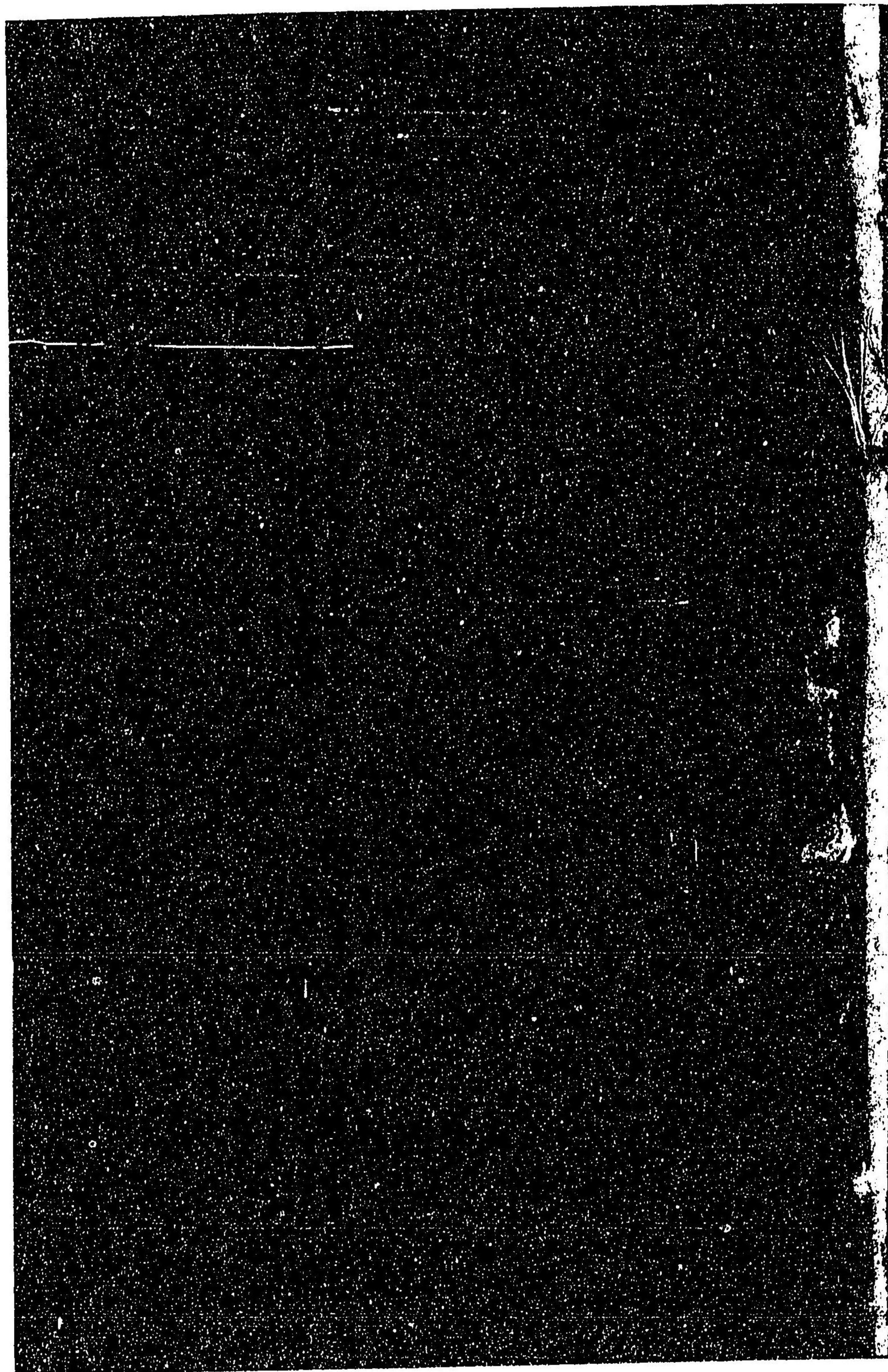
電話一〇三三番

花園町畑拾番地

北世界支社

花園町畑拾番地  
小樽圖書出版館



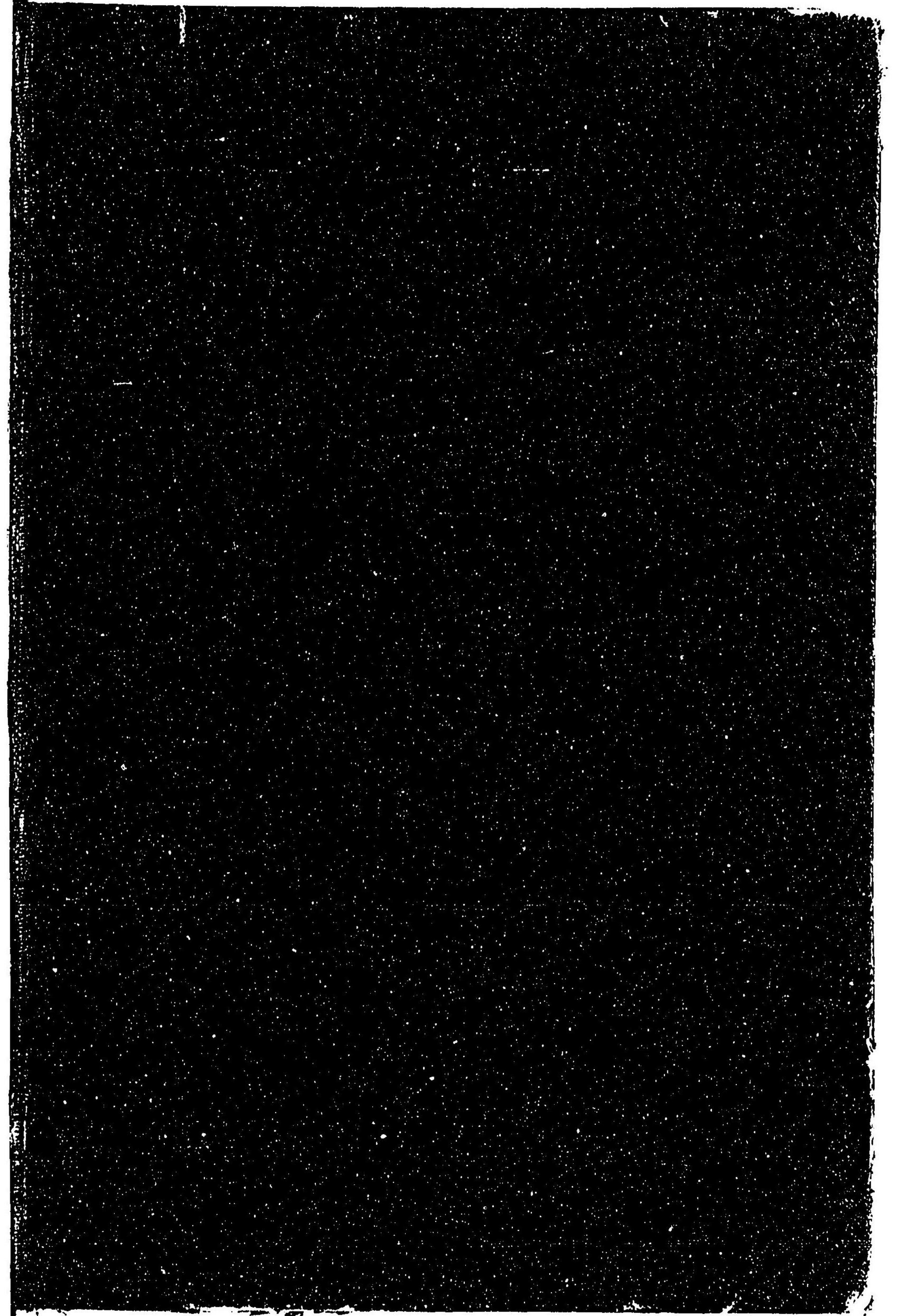




88

331







88  
331

023181-000-3

88-331

小樽区外七郡案内

山崎 鉦蔵/著

M42

ADC-0018





